地方都市の民間学習施設に関する考察

南　本　長　穂
（愛媛大学）

はじめに

今日，成人の学習活動の展開は広範多岐にわたっている。生涯教育理念の浸透のもと，成人の学習要求は高度化し，多様化してきた。この学習要求に対応するために，従来の公的社会教育とならんで，近年注目されているのが，民間経営の教育文化事業である。

もちろん，従来から新聞社などのマスコミ諸機関が一般成人に講演会，展覧会，発表会などの各種の事業を実施してきたのは周知のごとくである。[(1)] だが，本稿でとりあげる教育文化事業とは，今日，カルチャーセンター，文化センターなどとよばれる民間の経営する学習施設での講座学級である。[(2)] 民間経営体としては，新聞社，放送局，デパートが主なものである。[(3)] とりわけ，代表的なものに，朝日新聞社が東京，大阪，横浜，名古屋，札幌，神戸，九州に開設している朝日カルチャーセンターがある。東京に昭和49年４月に開設した朝日カルチャーセンターは，職員100人，講師数700人，講座数158科目461講座777クラスをもち，年間45,000人の参加者がある。[(4)] また，放送局としては，ＮＨＫ文化センター（昭和54年４月開設），デパートとしては，伊勢丹クローバーサークル（昭和48年３月開設）などがある。[(5)]

今日，このカルチャーセンター型の学習施設は，東京，大阪などの大都市だけでなく，全国各地に急速に開設されている。例えば，文部省は昭和51年４月から52年３月までの１か年間に，都道府県の県庁所在地に事務所を有する新聞社，放送局，デパートが成人を対象に行った社会教育・文化事業の概況を調査している。[(6)] これによると，８割前後の実施率である。開設学級・講座数は5,172，受講者は365,015人に達する。なお，その後も，全国的に，新しく多くの学習施設が開設されており，学級・講座も

ふえ，増々多くの受講者を集める傾向にある。

さて，近年，民間のカルチャーセンター型の学習施設がなぜこれほど成人の学習活動の展開のなかで重要な役割をになうようになってきたか。学習施設が成人の学習要求の高度化と多様化にうまく対応できたことによるだろう。つまり，程度も高く，多種類の学習内容を整えた。しかし，大都市にある学習施設と違って，地方都市の学習施設は成人の学習要求の高まりを充たすには，講座・学級の種類は少なく，講師の陣容もそれほど恵まれたものでない。この不利な条件にもかかわらず，なぜ受講者を多く集めるようになってきているのであろうか。そして，受講者はどのような学習要求をどの程度充足し，学習課題や生活課題を解決しているか。さらに，これらの学習施設は，公的社会教育（とくに公民館）にいかなる影響を与えているか。これらの問題に答えるために，成人の学習活動の進展にはたす地方都市における学習施設の役割を検討することが本稿の目的である。

1　研究の対象・方法

(一)　調査の対象

表1　教科コース（N学苑）

（昭和55年度）

教科名	教養コース	絵画・書道・彫刻コース	手芸・工芸コース	料理コース	音楽・舞踊コース	いけばな・茶道コース	健康コース	実用コース
	人間学シリーズ	洋画	ろうけつ染色	家庭料理	箏曲	嵯峨御流	ヨガ	チャームスクール
	源氏物語	水彩画	和裁	料理専科	日本舞踊	小原流	ヨット	現代作法
	俳句	日本画	フラワーデザイン	お菓子	喜多流謡曲	池坊		きもの着付け
	万葉集と短歌	版画	組紐		吟詠	華道池坊会		アマチュア無線（初級科）
	漢詩	俳画	ホームソーイング		民謡	煎茶雲井流		囲碁入門
	英会話	漢字書道	機械あみ		ギター	茶道裏千家		
	フランス語	かな書道	革の花			茶道表千家		
	中国語	ペン習字	陶芸					
	アナウンス	篆刻	木彫					
		仏像彫刻	紙絵					
			和紙人形					
			アートフラワー					
			革工芸					
			木目込人形					
			創作刺しゅう					
			籐工芸					
			手織					
			手あみ					
			七宝焼					
			戸塚刺しゅう					
	9教科	10教科	20教科	3教科	6教科	7教科	2教科	5教科

以上の問題の考察のために，愛媛県の県庁所在地・松山市（人口約41万人）にある民間の学習施設，「南海放送学苑」（以下，N学苑とよぶ）と「愛媛文化センター」（以下，Eセンターとよぶ）を対象に選定した。N学苑は地元の民間放送局の子会社として，市の中心部にある自社のビルで昭和51年に開設，4教室と料理教室及び健康体育教室の設備を有する。朝（10～12時），昼（13～15時），夜（18～20時）の時間帯でほぼ開設。なお，調査時点の昭和55年度の開講は62教科94講座（表1参照）。

他方，Eセンターは地元新聞社の事業部に事務局がある。開設以来，20年以上の歴史をもつ。開設当時は子ども向けの教室だけであったが，現在は成人を対象とした講座・学級を開設している。講座開設場所は，N学苑と異なり，新聞社内の施設に集中してなく，市内各所に点在する。この点では，従来多くみられた民間の学習施設の典型例でもある。[7] 成人を対象とする講座・学級は，昭和57年度で23教科34講座，そのうち9教科を新聞社内の教室で開設。なお，55年度は，18教科25講座，そのうち8教科を新聞社内で開講していた。

調査は，N学苑では昭和55年5月中旬に，Eセンターでは昭和55年9月に実施した。各教室で調査票を配布し，翌週の受講日に持参してもらい回収した。有効回答者は，N学苑788人，Eセンター257人であった。

なお，松山市には，この他に，カルチャーセンター型学習施設を二つのデパートが開設している。昭和57年度現在，Mデパートは21の文化教室と6つのスポーツ教室をもち，総定員が665人。Sデパートは8教室をもち，総定員210人。しかし，このデパートの教室は今回の調査対象に含めていない。

（二）受講者の特性

では，民間経営の学習施設には，どのような人が受講しているのか。受講者の特性を概観しておく，まず，受講者の年齢別（図1）では，同じ民間の学習施設でも，大きな差異がみとめられる。とくに，N学苑では20代の受講生が多い。Eセンターでは30代，40代が中心である。EセンターはN学苑に比べて開設講座の種類が少ない事情もあるが，主婦を対象とした講座内容の編成が多いことによるだろう。

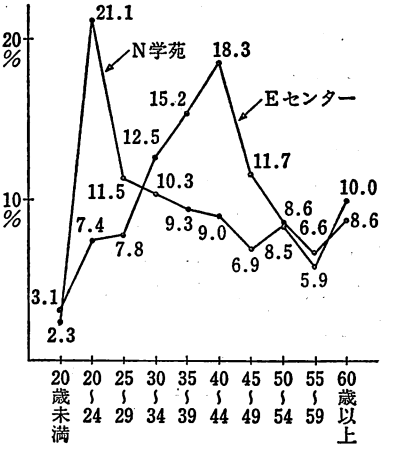
性別は，N学苑では男性11.0%，女性86.8%，無答2.2%。他方，Eセンターでは男性8.9%，女性91.1%である。どちらも女性のための学習施設といえるほど女性が多い状況にある。なお，大都市型の朝日カルチャーセンターの場合，東京，大阪とも，女性受講者の比率は75%前後とされる。[8] これに比べると，地方都市松山市の場合，女性受講者の占有率が高い。この原因は講座内容の編成にあるようだ。

独身か既婚かは，N学苑では29歳までは85.4%が独身，30代も25.8%が独身，全体で独身の占有率37.6%。Eセンターでは全体で21.0%が独身である。なお，N学苑では

小学校入学以前の乳幼児をもつ者は20代で5.1%，30代で23.9%，40代で4.7%である。

職業の有無は，N学苑で主婦37.9%，学生4.4%，就業者35.1%，無職14.6%，その他・無答8.1%。Eセンターでは，主婦58.7%，就業者24.9%。なお，朝日カルチャーセンターの受講者は主婦35.2%，有職者47.4%，学生3.0%[9]。松山の場合，圧倒的に主婦が多いことがわかる。

図1　年齢階層別の構成



家庭の年収では，N学苑では，「300～400万」が最も多く12.6%。次いで「500～600万」12.4%，「400～500万」11.7%，「700万以上」10.4%である。年齢別にみると，40代，50代での年収が多い。他方，Eセンターでは，「400～500万」が最も多く14.8%，次に，「500～600万」と「700万以上」がともに14.0%と多い。N学苑に比べて，20代の受講生が少ないだけ年収は多い。そして，両学習施設とも，受講生には経済的に恵まれた人が多い。

現住所での居住年数は，N学苑では，昭和53年以降現住所に住みはじめた人が20.1%。そのうち，県外から来た人39.9%，県内の他の市町村から来た人24.1%，同じ市町村で住所をかわった人36.1%。また，50～52年に住みはじめた人は15.9%である。Eセンターでも同様な傾向を示している。居住年数が短い人が多いことはそれだけ居住地域への関心も低いと考えられうる。

通学時間では，N学苑で，「30～60分」が最も多く36.4%，「15～30分」が27.3%，「15分未満」が19.3%，1時間以上要する人は，10.6%に過ぎない。なお，受講者の住所を市内の小学校区35で分類すると，受講者のいない校区は一つである。つまり，ほぼ全市から通学している。市外から通学する者は15.2%（121人）である。また，通学方法も，「電車・バス・国鉄」49.9%，「自家用車・バイク」25.1%，「自転車」12.1%，「徒歩」7.1%である。

受講クラスのなかで入学以前からの知り合いは，N学苑では，「全体の半数以上」2.8%，「1～5人程度」33.2%，「全くいない」59.3%。なお，性別による有意差はない。年齢別では，50代，60代では前からの知り合いが多く，20代，30代では少ない，Eセンターでは，「全くいない」45.9%で，N学苑に比べると，知人が多い。

最後に，受講講座の時間帯は，N学苑では，朝（10～12時）27.1%，昼（13～15時）36.4%，夜（18～20時）33.1%。年齢別では，20代は夜の受講者が多く53.2%，

30代は朝が最も多く38.5%，夜も29.6%と多い。昼の受講者が多いのは40代42.1%，50代47.8%，60代以上51.6%，そして，50代，60代以上では，夜の受講者は少ない傾向にある。

2　受講者の動機と目的

(一)　学習施設の認知と参加時間

現在の受講者はこれらの学習施設の存在をどのように知って，受講しようとしたか。まず，学習施設を知るようになった情報源からみていくことにする。N学苑では，「テレビ・ラジオ」が55.7%と多い。次いで「家族・友人・知人」26.3%，「ポスターや広告」6.3%の順である。Eセンターでは，「家族・友人・知人」が47.5%，ついで「新聞」が45.1%である。つまり，Eセンターでは情報源はこの二つに限られている。この結果は，N学苑が放送局の子会社という条件を生かしテレビ・ラジオでの宣伝を多用でき，他方，Eセンターは新聞社内に事務局を置くため新聞での広告をしやすいという設置主体の性格が反映している。とくに，Eセンターの場合には，開設時期の古さから，参加した者も多くミニコミ的な宣伝力がはたらく余地も大きい。

さて，N学苑の現在の受講者（昭和55年5月）はいつ頃から受講しているか。学苑が開設された昭和51年に初めて受講した者は9.1%，52年10.3%，53年17.1%，54年27.8%，55年35.0%である。つまり，かなり多くの者は長期間受講していることが予測できる。

ところで，学苑の存在を初めて知ってから，実際に受講しはじめたのは何年目か。知ったすぐその年に受講した者は39.2%，知った次の年に受講した者28.0%，3年目17.9%，4年目8.5%，5年目4.7%である。明らかに，N学苑を知るという行為自体が受講開始への動機づけになっている。知れば参加する人がでてくるわけである。もちろん，その際，何で知ったかという情報源のあり方が重要な問題となる。例えば，情報を得たすぐその年に受講した309人の情報源をみると，141人（45.6%）が「テレビ・ラジオ」であり，106人（34.3%）が「家族・友人・知人」である。この結果は先の情報源の数値と比べて理解できるが，「家族・友人・知人」という情報源が受講者を輩出する割合が大きい。つまり，ミニコミが受講行動をうながしやすい。

(二)　受講の動機

さて，受講の動機についてみておく。どういったきっかけで参加するようになったか，N学苑では次のようである。

1位　自由にできる曜日・時間に教科が開講されている……29.4%

2位　家族・友人・知人にすすめられて……28.3%

3位　案内状を読んで参加したくなった……9.8%

4位　家から近い，交通の便がよい……6.9%

5位　公民館の講座学級には参加しにくい……6.2%

6位　建物・設備が整った，学苑そのものに魅力を感じて……5.5%

7位　報道機関が後援しているので教科内容も信頼できる……4.6%

8位　公民館にない教科がある……1.8%，その他・無答……7.6%

以上は，N学苑の学習施設としてもつ特性に対し，どういった魅力の感じ方が参加動機になっているかをみたものである。やはり，受講希望教科が利用しやすい時間帯で開講されていることに第一番目の魅力を感じている。なお，公的社会教育施設の一つ公民館と比較しての魅力やマスコミ機関が後援していることから副次的に生まれる教科内容への信頼性あるいは豪華な建物を含めての施設・設備の充実度もN学苑の魅力を形成している。こうした動機は，最近のカルチャーセンター型の動機の特色でもある。

表2　教科コース別にみた受講動機（N学苑）

	家族・友人・知人のすすめ	家から近い，交通の便がよい	案内状を読んで	公民館にない教科	公民館には参加しにくい	自由にできる曜日・時間	学苑への魅力	教科内容への信頼性	その他	合計
教養コース	18.4	4.9	11.7	1.9	6.8	30.1	5.8	6.8	9.7	100.0
いけばな・茶道コース	22.2	8.3	12.5	0	5.6	33.3	6.9	4.2	6.9	100.0
実用コース	21.7	5.8	11.6	4.3	8.7	30.4	8.7	2.9	1.4	100.0
絵画・書道・彫刻コース	22.6	7.7	8.7	1.5	6.2	37.9	4.1	3.9	5.1	100.0
手芸・工芸コース	25.5	3.6	7.3	0	9.9	32.8	8.3	6.8	3.1	100.0
音楽・舞踊コース	30.0	12.0	8.0	2.0	4.0	22.0	6.0	10.0	0	100.0
健康コース	37.3	6.8	9.3	3.4	3.4	28.8	4.2	1.7	4.2	100.0
料理コース	36.1	9.3	10.3	1.0	2.1	35.1	1.0	1.0	3.1	100.0

また，この結果には男女別，年齢別，職業別に有意な差異は認められない。ただ，表2に示すように受講教科コース別にみると，おおよそ次のような特徴をとらえることができる。「教養」と「いけばな・茶道」と「実用」がほぼ同傾向を示し，「案内状をよんで」受講した者の割合が相対的に大きい。また，「絵画・書道・彫刻」と「手芸・工芸」とがほぼ同じ傾向を，同様に，「音楽・舞踊」と「健康」とがほぼ同じ傾向を示している。

(三) 受講目的

次に，何を求めて参加しているのだろうか。N学苑の受講者の受講目的をみてみる（複数回答）。多い順から，「趣味を豊かにする」59.8％，「教養や常識を深める」35.3％，「健康のため」23.0％，「家庭生活に役立てる」20.6％，「同好の友人を得る」12.2％，「仕事に役立てる」7.9％，「免許や資格をとる」3.9％，「子どもの教育」1.8％である。

この数値には年齢別に差異がみられる。とくに20代では，「教養や常識を深める」（41.6％）と「家庭生活に役立てる」（31.6％）が多い。とくに，結婚前の女性受講者が多いことによるだろう。30代では，「健康のため」（34.2％）と「仕事に役立てる」（11.0％）が他の年齢層に比べると多い。しかし，「教養や常識を深める」と「趣味を豊かにする」といった目的は他の年齢層に比べてあまり選好されていない。40代は他の年齢層に比べるとほぼ平均的な位置にある。50代になると，急速に「趣味を豊かにする」（70.4％）がふえ，同時に「教養や常識を深める」（38.2％）も多い。とくに，「同好の友人を得る」（20.9％）が各年齢層を通じて最も多い。いわば，個人的な学習の深化をめざすところに特徴がある。60代以上では，「趣味を豊かにする」（81.0％）と「教養や常識を深める」（46.9％）とが断然多い。その他の目的はほとんど選ばれていない。いわば50代の特徴をさらに進めたのが60代といえる。ただ，「同好の友人を得る」は多くない。この結果にみられるような年齢別の学習目的の差異は，地方都市における主に女性の生活課題や学習課題にうまく対応できているのだろうか。

さらに，教科コース別に表3により受講目的を聞いた。「音楽・舞踊」「手芸・工芸」「絵画・書道・彫刻」は主に「趣味を豊かにする」という目的での受講者が多い。また，「同好の友人を得る」という目的も相対的に多い。なお，「いけばな・茶道」コースもよく似た傾向にあるが，「家庭生活に役立てる」が多い。「教養」コースでは，やはり「教養や常識を深める」が多いが，「仕事に役立てる」と答えた者も少なくない。「健康」コースでは，ほとんど全員が健康をあげている。その他の目的をあげる受講者は非常に少ない。「実用」コースでは，「教養や常識を深める」が最も多いが，コースの性格を反映して，「家庭生活に役立てる」「仕事に役立てる」といった実用的な効用を指摘する者が多い。

他方，Eセンターの受講目的をみると，「趣味を豊かにする」（69.3％）が多い。ついで「健康・体力づくり」(34.6％)。なお，Eセンターは「子どもの教育」にかかわる講座が開設されていないので，その代りに「ストレス解消のため」を設けた[10]。これを選択した者は多く24.5％である。その他，「同好の友人を得る」（22.2％），「教

表3 教科コース別にみた受講目的（N学苑）

（三つ以内の複数回答）

目的／コース	趣味を豊かに	教養や常識を深める	家庭生活に役立てる	仕事に役立てる	免許や資格をとる	健康のため	同好の友人を得る	子どもの教育
音楽・舞踊コース	84.0	32.0	2.0	0	10.0	34.0	16.0	4.0
手芸・工芸コース	80.7	22.9	17.7	5.7	5.7	10.4	18.8	0
絵画・書道・彫刻コース	76.9	43.1	11.3	5.1	4.1	9.2	17.4	2.1
いけばな・茶道コース	69.4	48.6	26.4	4.2	5.6	6.9	4.2	1.4
教養コース	46.6	68.0	8.7	17.5	2.9	9.7	7.8	2.9
料理コース	45.4	41.2	69.1	8.2	2.1	11.3	7.2	2.1
健康コース	15.3	11.0	14.4	3.4	0.8	97.5	4.2	1.7
実用コース	13.0	72.5	59.4	20.3	5.8	13.0	7.2	1.4

養や常識を深める」（21.4%），「家庭生活に役立てる」（13.6%），「免許や資格をとる」（3.5%）と，N学苑とほぼ同様な傾向を示している。以上の受講目的からわかるように，地方都市におけるカルチャーセンター型学習施設は，大都市のそれに比べて，学習を目的とした施設というより趣味を豊かにするといった趣味施設のほうに近い。にもかかわらず，多くの受講者をかかえるという今日的特徴がある。

3 受講の成果

（一） 受講者の満足度

受講者は講座に参加することによってどの程度満足感を味わうことができたか。次の五つの点からみていこう。第1に，受講以前にもっていた期待がどの程度実現できたか。N学苑での全体的な感情からみると，「まあまあ期待どおり」とする者は80.6%に達している。「なんともいえない」が11.2%，「期待はずれ」とする者はわずかに0.4%である。Eセンターでは，順に，90.3%，3.0%，2.3%である。両施設の受講者とも，高い満足度を得ていることがわかる。もちろん，出席を強制されない成人の学習施設のため，不満をもてばいつまでも受講を継続するとはとうてい考えられない。

そこで継続期間の違いによる期待充足度をみた。「ほぼ期待どおり」と答えた人をN学苑での受講者でみると，受講開始が51年の者で87.5%，52年81.5%，53年83.7%，54年84.5%，55年74.6%である。調査時点の55年を除くとすべて8割以上の満足度で

ある。つまり，満足度が高いゆえに継続した受講者がでてくるのであろう。なお，55年は少し低いが，当然十分に満足の得られなかった者がおり，その低い比率だけ受講をやめていったのだろう。

さらに，この年齢別では，30代，40代で充足度が高い。充足度は30代87.1%，40代で84.7%，20代79.0%，50代77.4%，60代以上73.4%である。同様に，教科コース別では，表4に示すように，充足度の高い順に，「健康」「いけばな・茶道」，「手芸・工芸」，「実用」，「音楽・舞踊」，「教養」，「絵画・書道・彫刻」，「料理」(75.0%)である。充足度には教科コースでかなりひらきがあることがわかる。

表4　教科コース別受講者の満足度（N学苑）

充足度あり ＼ コース	参加して（期待充足度）	学習したこと（効用度）	人間的ふれあい	他の受講者の意見から	知人・友人に話すこと
教養コース	80.0	76.4	58.2	45.5	27.3
絵画・書道・彫刻コース	78.2	82.7	72.8	62.4	30.7
手芸・工芸コース	84.7	86.9	82.5	61.2	48.1
料理コース	75.0	84.5	67.9	38.1	35.7
音楽・舞踊コース	82.4	82.4	88.2	76.5	25.5
いけばな・茶道コース	86.5	87.8	62.2	31.1	28.4
健康コース	90.6	91.4	77.7	48.9	42.5
実用コース	83.6	83.6	64.4	41.1	42.5

第2に，学習の成果の一指標として学習内容の効用度を聞いた。N学苑では，「まあまあためになる」は81.3%と多い。なお，「なんともいえない」(10.9%)，「ためにならない」(0.3%)。Eセンターでは，「まあまあためになる」は87.5%とN学苑を上回っている。なお，N学苑を年齢別にみると，やはり，30代85.2%，40代83.5%が高く，20代81.0%，60代以上78.5%，50代76.5%である。Eセンターでも40代，30代が高い効用度を指摘している。また，N学苑の教科コース別（表4）では「健康」(91.4%)が高く，最も低いのが「教養」で76.4%である。

第3に，講師や他の受講者との人間関係(人間的なふれあい)の緊密度を聞いた。N学苑では，「まあまあもてる」が71.7%，「なんともいえない」が16.8%，「それほどない」5.1%。Eセンターでは，それぞれ82.1%，10.1%，3.9%であり，N学苑に比べると，より親密な人間関係が予想できる。この相互関係の深まりは開設教科の種類にも関連があるだろう。例えば，N学苑でも，「音楽・舞踊」は88.2%，「手芸・工芸」82.5%，「健康」77.7%と高いのに比べて，「教養」58.2%と低い。つまり，

教科の種類により，講義・実技の指導方法や学習と場の雰囲気の違いが人間関係に影響を及ぼしていると考えられる。

第4に，他の受講者の意見から学ぶ機会が多いかどうかを聞いた。これは人間関係から得られる個人の学習目的の達成にかかわる成果である。N学苑では，「まあまあ多い」52.0%「なんともいえない」29.8%，「それほどない」10.7%である。明らかに，先に示した成果に劣る。Eセンターでもほぼ同じ傾向であり，56.0%，26.1%，12.5%である。年齢別では，両者とも，50代，60代以上で高いが20代では低い。N学苑で先の三つの満足度で高い数値を示していた30代，40代もここでは高くない。教科別（表4）で，「音楽・舞踊」，「絵画・書道・彫刻」，「手芸・工芸」は高いが，「いけ花・茶道」，「料理」，「実用」などは低い。この結果は各講座の指導方法に対応して生まれていると思われる。明らかに，教師の説明や教示が多用される場面が多い講座では低い。

第5に，学習施設で学んだことを生活の場でいかに他の人に伝達しているかを聞いた。学習した内容を家族・友人・知人に話すことがあるかどうかは，N学苑で，「まあまあ多い」36.9%，「少しはある」54.1%，「ほとんどない」4.7%，Eセンターもほぼ同じ傾向で，37.0%，55.6%，4.7%。この成果は，先の四つの成果に比べて最も低い。しかも，年齢別にみても結果にほとんど差異がない。N学苑の教科別（表4）では，「いけばな・茶道」，「教養」，「音楽・舞踊」がとくに低い。いわば，受講者は自らの学習課題に非常に狭い個人的な興味・関心で取り組んでいることがわかる。たしかに，一定の満足感を得ているが，学習成果の拡がりという点で学習活動の展開に改善点が必要であろう。

（二） 学習施設の評価

さて，受講者の学習施設への評価，またその分析を通して今後における学習施設の方向の一端を深ることにしよう。受講者がさらにどのような要求，希望をもっているか，次の五つの点から明らかにする。第1に，講義内容の程度はどうか。N学苑では，「もっと高度な専門的な内容を」10.3%，「もっとやさしい内容を」12.9%，「不満はない」68.3%である。Eセンターでは，5.8%，10.8%，79.8%と満足度は高い。N学苑の教科別（表5）では，「教養」と「料理」に改善への要求がある。この二つの教科コースとも，「もっとやさしい内容を」という要望が強い。逆に，不満がないと評価する者の割合が大きいのは「いけばな・茶道」である。いわば，指導内容の体系という方法が形式化されている教科には不満は少ない。なお，年齢別でも，30代，40代は不満は少ない。20代では不満が多い。しかも，その不満も高度化・専門化にあるというより，現在の水準が高すぎることによる不満である。

第2に，講師の指導法への要望を聞いた。N学苑では，何らかの不満をもっている者が24.2%，不満のない者67.8%である。Eセンターでは，21.8%，73.5%。N学苑の年齢別では，30代，40代で不満は少ない。60代以上は不満をもつ者が多いが具体的な不満の内容を表明していない。教科別(表5)で不満が少ないのは，「いけばな・茶

表5　教科コース別受講者の満足度（N学苑）

不満はない ＼ コース	講義内容	講師の指導	設備	受講生の数	受講料
教養コース	62.7	66.4	77.2	73.6	62.7
絵画・書道・彫刻コース	71.3	63.4	74.3	69.8	58.2
手芸・工芸コース	70.5	72.1	72.7	74.9	57.9
料理コース	64.3	67.9	66.7	79.8	35.7
音楽・舞踊コース	66.7	62.7	51.0	66.7	70.6
いけばな・茶道コース	77.0	75.7	73.0	82.4	55.4
健康コース	74.1	69.1	46.0	60.4	38.8
実用コース	67.1	68.5	67.1	72.6	63.0

道」「手芸・工芸」である。不満が多いのは，「絵画・書道・彫刻」と「音楽・舞踊」である。指導方法の改善を求める要求が最も多いのは「料理」である。この教科内容の習得に必要とされる知識や技能の獲得にさいして，方法上の多様性と複雑性にかかわる教科の性格によって，不満も多岐にわたるのであろう。もちろん，この教科の学習の機会は，この施設に限らず，社会教育のあらゆる場にあるといった事情にもよるだろう。それだけ，他の機会と比較して，不満を表明しやすいことになる。

第3に，設備への要望について聞いた。N学苑でなんらかの不満をもっている者は24.9%。不満をもっていない者は65.9%である。年齢別には，30代，20代に不満が多い。50代，60代は満足を感じる者も少ないが，明確に不満を表明する者も少ない。教科別（表5）では，「教養」と「いけばな・茶道」で「不満がない」とする者が多い。両教科とも，他教科ほど施設設備を必要としないことによるだろう。逆に，「健康」，「音楽・舞踊」には不満が多い。いずれも広い恵まれた施設設備を必要とする。「もっと広く，大規模な」といった要望が強い。

第4に，同じ講座に所属する受講者の数の最適性を聞いた。「もっと多く」5.3%，「もっと少なく」15.5%，「不満がない」70.8%である。Eセンターでは，2.7%，12.1%，80.5%であり，不満は少ない。N学苑の教科別（表5）では，「いけばな・茶道」，「料理」，「手芸・工芸」で不満は少ない。逆に不満が多いのは「健康」であ

る。「もっと少なく」が35.3%に達する。とくに人気の高い「ヨガ」の講座の受講者数と教室の収容人数に関係する。55年度1週間に2日7クラスが，57年は1週間に3日9クラスに，増大したほどである。また，「絵画・書道・彫刻」でも，「もっと少なく」が21.3%に達する。だが逆に，「音楽・舞踊」は，「もっと多く」（11.8%）という要望がある。この受講生の数は，望ましい学習条件としての人数規模と企業経営の効率という立場での人数規模との均衡の問題と深くかかわる。N学苑では1クラス5人以下は開講しないと明記されている。成人の学習要求の多様化に対応しているところに学習施設の特色があるとはいえ，教科の種類の増大は経営の論理に依存している。

第5に，受講料について聞いた。民間経営であるゆえ，経営の基盤は受講料にある。受講料についてどう考えているのか。なお，N学苑では，昭和55年度入苑金3,000円，受講料は特定の教科を除き1か月平均1,800円～6,000円である。この他に，教科によりテキスト代，材料費がかかる。「もっと高くてもよい」とする者は一人もいない。「もっと安くしてほしい」が40.1%である。年齢が若いほどこの要望は強い。20代55.1%，30代45.2%，40代29.1%，50代26.1%，60代以上15.2%である。教科別（表5）では，「もっと安くしてほしい」が多いのは，「料理」（月平均の受講料のみ6,000円)。逆に，不満が少ないのは，「音楽・舞踊」(同2,816円）と「教養」(同2,650円）である。この中間に，不満が約30%強の「絵画・書道・彫刻」（同3,080円)，「手芸・工芸」（同2,793円）が位置づく。他方，Eセンターは，入校金3,000円，受講料は全教室平均1か月2,800円である。「もっと高くてもよい」は1.6%，「もっと安くしてほしい」は7.9%，「不満はない」は77.4%である。N学苑に比べて，不満は少ない。

4　受講者からみた公的社会教育

(一)　公民館への参加度・その必要性

ところで，この学習施設は公民館などの公的社会教育施設とどのような関連にあるか。自らの居住地域に関係なく，受講料さえ支払えばだれでも参加できるのがカルチャーセンター型の民間経営の学習施設である。これに対し，公民館は一定の地域範域の中の住民を対象とする社会教育施設である。この特徴をふまえて，受講者の立場からこの関連の現状及びそのあり方を考察していく。

まず，学習施設に参加してる人々は公民館をどう利用してるか。N学苑受講者の公民館で開催される講座・学級への参加の程度をみると，「積極的に参加している」

4.9%，「まあまあ参加している」11.7%，「あまり参加していない」16.0%，「全く参加していない」64.1%。他方，Eセンターでは，順に，3.9%，17.9%，26.5%，45.5%である。Eセンターの受講者の方が公民館によく参加している。

ところで，地方都市では，公民館は居住地域を中心とした一定の範域に設置されている。大抵の地域住民には他の公的社会教育施設に比べてなじみ深い。しかも，地域に長く住むほど公民館に，講座学級への参加以外にも，集会で利用とか，サークルとか，奉仕活動とか，運動会とか，スポーツ・レクリエーションとかで，当然何度か足をはこぶ機会がふえるはずである。それゆえ，学習施設の受講者には公民館にまだなじみのない新しく移り住んできた居住者が多いのではないかと仮定した。

だが，これは調査結果では実証されなかった。例えば，昭和53年以降現在の住所に移ってきたN学苑の受講者のうち，公民館の講座・学級への参加者16.8%，全く参加していない者65.9%である。そして，公民館の講座・学級への参加率が最も高いのは，昭和50〜52年の間に移り住んできた受講者である。参加者23.2%，不参加者54.4%である。この結果からわかることは，N学苑の受講者をみる限り，居住年数と公民館の講座学級への参加率との間には相関がないことである。居住年数が短いか，長いかは公民館への参加率に影響していない。Eセンターの受講者にも，同様な傾向がみられる。

それでは，学習施設の受講者は公民館での講座学級についてどう考えているか。「公民館の講座学級が今後一層充実していくことが必要だと思われますか」という設問により，講座学級の必要性を聞いた。N学苑では，「ぜひ必要だと思う」27.5%，「まあまあ必要だと思う」48.5%，「あまり必要だと思われない」14.2%，「全く必要だと思わない」2.5%である。そして，必要性を認める者は相対的に公民館の講座学級への参加率の高い者に多い。講座学級への参加者のうち，ぜひ必要だが50.8%，必要ないがわずかに5.4%である。逆に，全く参加してない者は，ぜひ必要だが22.8%，全く必要ないが16.8%もいる。つまり，実際には，公民館での講座学級の必要性を認めながらも，そこでの学習活動には多くの者は結びついていないのである。それはなぜか。以下，その原因を探るなかで，それぞれの施設の特徴を明らかにしよう。

（二）学習施設と公民館

さて，学習施設と公民館とはそれぞれどのような利点・長所をもっているか。まず，学習施設の利点・長所をN学苑の受講者の意見からみると，① 公民館にない教科が開設されている，23.2%。② 講師の陣容が整っている，17.3%。③ 受講料を払えば，だれでも，いつでも参加できる，16.9%。④ 興味・関心のよく似た（共通の学習課題をもつ）者が集まっている，12.6%。⑤ 指導計画がしっかりしている，

9.0%。⑥ 建物，設備が整っている，8.6%である。また，Eセンターの受講者のそれは，① 18.7%，② 19.8%，③ 16.7%， ④17.9%，⑤ 7.8%，⑥ 7.0%である。

この結果が示す第一点は，以上の利点のなかでとくに多く選択されたものがないということである。それだけ，学習施設に受講者一人ひとりが，その人のおかれた学習条件のもとでその学習条件を高めるべく，それぞれ利点をみいだしている。

第二点は，この様々な利点のなかでも，強いていえば，開設教科の種類の多さと豊富な講師の陣容とを学習施設の利点として認める者が相対的に多いことである。
居住地域の住民に対する公的社会教育サービスで中核的な役割を担う公民館といえども，この利点を実現することはなかなか困難である。とくに各公民館単位で独自の企画で実施する事業では明らかに限界がある。こうした公民館のもつ限界を，ひとりの住民の立場から，克服する方策の一つとして求めたものがこの学習施設への参加ではなかろうか。実際に，N学苑の受講者で，しかも公民館の講座学級にも参加している者は，学習施設の利点の第1位として，公民館にない教科が開設されている，をあげている。36.9%もの高い選択率から，このことは理解できる。

第三点は，受講に際しての手軽さという利点である。受講料さえ払えばだれでも受講できる。自分の自由にできる時間帯を選んで受講できる。しかも，共通な学習課題をもつ人々が集まってきている。しかも，あらかじめ指導計画がたてられており，それに従えばよい。学習の入門期にはとくに学習がスムーズに進む。そして，施設もデラックスで設備も整い，交通の便も悪くない。こうした諸条件がかみ合って，気軽な気持で参加できるという利点は見落とせないだろう。

他方，公民館の利点としては，① 受講料が安い（経費が少ない），20.9%。② だれもが関心のある講座学級が開かれている， 6.1%。③ 親しい人が多いので自由な質疑応答ができる， 6.0%。④ 互いに困った時に助けあえる人間関係ができる，5.6%。⑤ 参加者の自主的活動ができる。2.8%。⑥ 地域への関心が深まる，2.7%。なお，参加していない者は40.2%。Eセンターでは，① 18.3%，② 3.9% ③ 4.3%，④ 4.3%，⑤ 3.1%，⑥ 10.1%。参加してない者は42.4%である。

この結果が示す第一点は，公民館の講座学級への参加者が多くないということである。やはり，公民館の取り組んでいる各種の事業の一つである講座学級の存在に関する情報を地域住民に広報活動を通していかに知らせていくか。こうした広報活動のなかで住民の関心興味も高まり，講座学級のもつ利点も認識されるようになるだろう。学習施設がマスコミを通じてあらゆる機会に宣伝を積極的に行い，そのよさを認知させ，参加意欲をかきたてている民間の学習施設の広報活動の展開のしかたにも学ぶところが大きい。

第二点は，調査結果にみられる最大の利点は経費の少なさということである。とくに，N学苑の受講者の中では，公民館の講座学級への参加者ほど，その利点として経費の安さをあげている。民間学習施設の経費の高さと比べれば，そこには大きな差異があろう。この点では，公民館のそれは地域住民すべてに開放された学習機会であるといえよう。

第三点は，学習のための人間関係が生活の場での協同活動に移行・発展していくといった利点をもっていることである。公民館での事業は，講座・学級を中心とした学習活動の展開だけではない。集会活動もあるし，奉仕活動もあるし，地域住民の連帯感を形成する活動など，実に様々である。こうした住民一人ひとりの生活上の要求や地域の課題に対応した学習活動が展開することも大いにありうる。いわば，こうした活動の中で，学習施設にはそれほど起こりえない，自主的サークルでの自主的な学習活動の展開も可能となろう。

5　結　　語

近年，大都市を中心に普及してきた成人を対象とした民間経営のカルチャーセンター型の学習施設は地方都市にもみられるようになってきた。しかし，地方都市の学習施設は大都市のそれに比べて，少し違ったかたちで成人の学習活動を促進しているのではないか。こうした問題設定から，松山市の「南海放送学苑」と「愛媛文化センター」を取り上げ，受講者の特性，受講者の動機と目的，受講の成果，公的社会教育との関連の分析を通して，地方都市における成人の学習機会としての学習施設の問題を考察してきた。

民間経営の学習施設における学習活動の展開のために留意すべき問題を，この調査結果から明らかになった範囲で提示しておく。

第1に，地方都市の学習施設の受講者は，大都市以上に，女性の受講者が多い。明らかに，開講講座の主要な内容は趣味，おけいこごと，健康体育，料理といった教科で構成されている。大都市の学習施設はきそって特色ある教養講座を開設することを事業の重点の一つにしている。これに対して，地方のそれは少し異なっており，教養講座は必ずしもその講師の陣容から人気教科ではない。それゆえ，男性にも十分魅力ある講座内容を編成すること。女性，男性を問わず，成人の多様な学習活動を保障する場をめざすことが要請されよう。

第2に，地方の学習施設の現状では，その学習活動は趣味を豊かにするとか，教養や常識を深めるとか，暇つぶし，ストレス解消のためだけにとどまる傾向にある。だが，今後，積極的に自らの生活課題を解決すべく，新しい知識・技能を習得したり，

自己をみつめなおす自己確認的学習活動の展開なども必要である。そうしたとき，営利を目的とした学習施設といえども，生涯教育理念の実現化のなかでより重要な役割を担うだろう。

第3に，大都市の学習施設は成人の学習要求の多様化と高度化にうまく対応したことで注目を集めている。すなわち，各種の講座を開設することにより多様な学習内容を取り上げ，しかも学界の有名一流講師を配置し程度の高い学習内容を提供している。いわば，高学歴社会の出現のもとで，この学習内容の多様化と高度化を実現できたことが成功の鍵であった。だが，地方都市の学習施設は少しく事情が異なる。学習要求の多様化には確かに地方都市にはかつてない規模で対応できたが，しかし，高度化という点では問題があろう。もちろん，多様化といえども，大都市のように教養講座主導型の多様化ではなく，趣味，おけいこごと，健康体育，実用といった従来から女性の興味関心を集めた領域を中心に，多種の教科を増大させた多様化である，開設した教科の内容の程度は，その多くが入門期を中心としたものであり，むしろ，各教科の程度は，おけいこごとであれば個人教授が，料理であれば専門学校が程度は高い。公民館で開設している講座学級の程度となんら変わらないものも多い，といった特徴がある。むしろ，成功への鍵は，手軽に参加できる学習機会というところにあろう。大都市と異なり，成人の学習活動の環境は，地方都市ではまだまだ恵まれていない。そうした条件の中で生まれる，だれでも珍しい教科を学ぶことができる。この点に地方都市の学習施設の特色があろう。

第4に，地方都市においても，民間の学習施設が成人に多大の満足をもたらしていることがわかった。しかし，これが成人の学習機会のすべてとなっては問題が起こる。学習意欲の高まりや学習活動による成果が，この施設での継続的学習の展開や個人的な枠のなかだけにとどまるなら問題であろう。それで，公的社会教育（公民館など）の提供する学習機会とも関連を深め，学習活動を進展させることも今後一層望まれるだろう。学習施設での成果を，生活の場に役立てる活動を展開したり，自らの生活課題や生活の場である地域課題をとりあげ，自主的グループ・サークルなどで学習者同志の様々な結びつきや，その協同活動の高まりを求めていくことも必要であろう。いわば，こうした学習施設と公的社会教育の関連性を，各地域の条件に応じて探っていくことは，両者の発展にとって重要な課題となろう。

〔注〕

(1) 片岡徳雄「潜在的な社会教育」新堀通也編『日本の教育地図—社会教育編』ぎょうせい，昭和50年，pp. 323～46参照。全国的な視点から民間の社会教育を分析している。

(2)　なお，本稿では次の論稿に従ってカルチャーセンターとか文化センターとよばれる施設を学習施設という言葉で総称している。山本恒夫「民間学習・趣味・娯楽施設の布置構造」河野重男他編『社会教育の施設』(社会教育講座第四巻)，第一法規，昭和54年，pp. 287～93参照。

(3)　「座談会　新しい成人教育の波――カルチャーセンター方式をめぐって――」『コミュニティと生涯教育』(コミュニティ63) 地域社会研究所，昭和57年，p. 54参照。

(4)　日本余暇文化振興会他『我が国のノン・フォーマル教育の現状と課題――生涯教育の視点より――』総合研究開発機構，昭和55年7月，pp. 170～3参照。なお，朝日カルチャーセンターの報告は多い。例えば，大阪大学人間科学部社会教育論講座『民間教育文化事業――大阪朝日カルチャーセンターに関する調査研究――』(第一次報告) 昭和56年。多田治夫・古野有隣「民間教育事業の実態に関する調査」金沢大学『社会教育研究』(第15号) 昭和51年，pp. 63～125。岩崎三郎・林三平・幸田三郎「都市における成人講座受講者の学習行動に関する一考察――新宿区における事例調査」『青山学院女子短期大学紀要』(第30集)，昭和51年，pp. 101～38。山崎功ほか「朝日カルチャーセンターにみる大人の学習」『月刊社会教育』国土社，昭和52年4月号，pp. 53～61。宮原誠一・室俊司「朝日カルチャーセンターと生涯教育」『月刊社会教育』国土社，昭和53年1月号，pp. 62～7。磯山浩「朝日カルチャーセンター」『社会教育』全日本社会教育連合会，昭和49年7月号，pp. 6～8。緒方正一「『生涯学習』に集う人びと――朝日カルチャーセンターの現況――」『社会教育』全日本社会教育連合会，昭和50年12月号，pp. 35～7。神田道子・女子教育問題研究会編『学習する女性の時代』日本放送出版協会，昭和56年，第Ⅳ章参照。小此木啓吾他「子育て以後は文化教室」『中央公論』中央公論社，昭和56年5月号，pp. 218～30。など多数。

(5)　日本余暇文化振興会他前掲書 pp. 180～6参照。

(6)　文部省社会教育局社会教育課『民間における社会教育・文化事業の概況』昭和53年3月。

(7)　山本恒夫前掲論文 p. 287。彼は新旧の学習施設を次のように区分している。「従来の民間学習施設は，学習の種目ごとに別個の学習施設として一定地域内に点在していたが，最近のそれはすべてを一点に集中させたといっても過言ではないほどの集中化をはかっている」と説明する。この点では，南海放送学苑は新しい学習施設であり，愛媛文化センターは従来のそれである。

(8)　大阪大学人間科学部社会教育論講座前掲調査報告書，p. 27

(9)　前掲調査報告書，p. 32

(10) なお，学習の目的と学習の動機とを区別することはかなり困難な作業である。ここでも「ストレスの解消のため」は学習の動機ともとれる場合もあるが，目的と規定した。なお，成人の学習の動機を分類したものに次のようなものがある。Knowles, M. S., The Modern Practice of Adult Education (Association Press) 1980. p. 89。

(11) 片岡徳雄他『競争と協同』黎明書房，昭和49年，参照。

付記　本調査は，愛媛大学地域社会総合研究所の補助（プロジェクト名，「地域特性別にみた住民ニード調査」）を受けて実施した（昭和54年度）。なお，調査票は，曲田清維（愛媛大学）と分担し作成した。